

「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー



「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」開催記録

1. 斑鳩三塔～法隆寺・法起寺・法輪寺～



● 開催日時・場所

・平成30年8月18日（土曜日）

午後1時30分～午後3時（開場：午後1時）

・日比谷図書文化館 地下1階 日比谷コンベンションホール

（東京都千代田区日比谷公園1-4）

● 講師



法輪寺住職 井ノ上 妙康 師



斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課  
参事・考古学技師 平田 政彦 氏

● 司会進行

斑鳩町観光キャンペーン大使 藤江 祐太

● 井ノ上住職と平田技師による対談のようす



平成30年度文化庁文化芸術振興費補助金  
（文化遺産総合活用推進事業）

13 : 00		<p style="text-align: center;">～開場～</p>
13 : 20	<p>斑鳩町観光 キャンペーン大使 藤江祐太 (以下、藤江)</p>	<p>本日は、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>本日のプログラムは、予定どおりこの後、午後1時30分に開演いたします。終了予定時刻は午後3時となっております。</p> <p>開演までのお時間をお借りしまして、本日、配布しております資料のうち、「聖徳太子の里ウォーク」について、ご説明させていただきます。</p> <p>斑鳩町では、隣接する聖徳太子ゆかりの町とともに、11月24日と25日、聖徳太子の里ツーデーウォークを開催いたします。法隆寺・法起寺・法輪寺の斑鳩三塔をめぐるコースなど、聖徳太子の伝説がいっぱいのウォークイベントです。</p> <p>また、自由に斑鳩の里を歩きたい方は、「奈良斑鳩・里めぐりMAP」をご覧ください。ルート1. 古代ロマン三塔めぐりルートなど、3つのおすすめルートとともに、おすすめのお食事スポットなどを紹介しています。</p> <p>世界文化遺産・法隆寺はもちろん、1日たっぷり楽しめる斑鳩の里へ是非お越しください。</p>
13 : 30	<p>藤江</p>	<p>皆様こんにちは。</p> <p>ただいまから、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」を始めさせていただきます。</p> <p>本日、司会進行を務めさせていただきます、斑鳩町観光キャンペーン大使 藤江祐太（ふじえゆうた）と申します。どうぞよろしく願います。</p> <p>それでは、主催者を代表いたしまして、世界文化遺産地域連携会議・斑鳩プロジェクトチームの委員であり、斑鳩町副町長の乾善亮（いぬいよしたか）からご挨拶申し上げます。</p>

13 : 31	斑鳩町副町 長 乾善亮	<p>乾副町長、よろしく申し上げます。</p> <p>みなさん、こんにちは。</p> <p>連日の猛暑が続いておりましたが、ここ2、3日、少し和らいでまいりまして、朝晩過ごしやすくなったことと思います。そんな中で、今日はたくさんご来場いただきまして、ありがとうございます。</p> <p>ただいま、司会から紹介のありました、奈良県斑鳩町で副町長をしております、乾善亮でございます。主催者であります、「世界文化遺産」地域連携会議・斑鳩プロジェクトチームを代表いたしまして、セミナーの開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。</p> <p>この度、「法隆寺地域の仏教建造物」が姫路城とともに、日本の世界文化遺産の第1号として登録されてから、25周年を迎えることとなりました。その記念といたしまして、今回、斑鳩の魅力をさらに広く再発信したいということで、文化庁のご支援を受けながら、全部で5回のセミナーを開催する運びとなりました。講師には、斑鳩町ゆかりの5名の方々をお招きし、また、斑鳩町の職員で考古学技師の平田政彦（ひらたまさひこ）が講師を務めさせていただきます。それぞれの講演のあと、2人の対談という形になってまいります。対談の中でどんな話が出てくるのか、ひとつ楽しみにしていただけたらと思います。</p> <p>法隆寺につきましては、ご承知のように、世界最古の木造建造物ということでございまして、多くの観光客の方にお越しいただいております。会場の皆様も一度は法隆寺に修学旅行等で来ていただいたことと思います。しかしながら、最近、少子化あるいは修学旅行の多様化ということで、修学旅行生も減少してきております。逆に外国人の観光客の方は増加しているということでございまして、全体として観光客の数は横ばい状態ということでございます。</p> <p>法隆寺のお寺だけを見ていただいて、すぐにほかの観光地に行かれるという「通過型観光」でございまして、これを何とか斑鳩で滞在していただいて、体験をしていただく「まちあるき観光」をすすめていこうということで、斑鳩町の観光戦略で計画を立てまして、今取り組</p>
---------	----------------	---

<p>13 : 35</p> <p>藤江</p>	<p>んでいるところがございます。その一つとして、法隆寺の周辺では、新しく店舗や宿泊施設を建てることは、建築規制が厳しいためできませんでした。これを規制緩和していこうということで、平成26年10月に法隆寺周辺の地区を一部規制緩和をいたしました。その結果古民家を改装したカフェや雑貨屋などが数件できております。また、斑鳩町内にほとんどなかった宿泊施設が、この規制緩和によって法隆寺の門前に、来年の夏に1件オープンする予定です。こちらは宿坊型の宿泊施設です。さらに、斑鳩町も町有地を活用して宿泊施設の事業者を誘致しようということで、マルシェ・宿泊施設・観光駐車場の複合施設の誘致をすすめております。こちらにおいては早ければ2年後くらいには完成し、斑鳩町に宿泊施設が2件できるのではないかと期待をしているところがございます。</p> <p>東京オリンピック・パラリンピックの翌年にあたります2021年には、聖徳太子がお亡くなりになられてから1400年御遠忌を迎えます。宿泊施設もこの時期にはできていると思いますので、この機会に是非、斑鳩にお越しいただきまして、斑鳩に宿泊していただき、斑鳩を散策していただきまして、体験していただくことで、聖徳太子のおもかげに出会っていただけるのではないかと考えております。</p> <p>ぜひ斑鳩にお越しください。お待ちしております。</p> <p>簡単ではございますが、主催者を代表いたしましてのあいさつとさせていただきます。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>乾副町長、ありがとうございました。</p> <p>ここで、私から、世界文化遺産・法隆寺のあるまち・斑鳩についてご紹介させていただきます。</p> <p>斑鳩町は、奈良県の北西部に位置する、古来からの交通の要所です。飛鳥時代、聖徳太子が寺を建てるのにふさわしい土地を探しておられたとき、龍田明神が白髪の老人の姿となって、「ここより東に斑鳩の里がある。そこに寺を建てなさい」というお告げがあり、聖徳太子は斑鳩の里に法隆寺を建立されたと伝えられています。</p>
--------------------------	--

また、聖徳太子は、斑鳩の里に「斑鳩宮（いかるがのみや）」「中宮（なかみや）」「岡本宮（おかもとのみや）」「葦垣宮（あしがきのみや）」の4つの宮を造営し、一族で暮らしておられました。今なお、斑鳩には、聖徳太子ゆかりの寺社や史跡と、つみかさなる歴史が多く残されています。

そして、西暦607年に法隆寺が建立されてから1400年、平成5年12月には、「法隆寺地域の仏教建造物」が、日本ではじめて、姫路城とともに、世界文化遺産に登録されました。

このセミナーは、世界文化遺産登録25周年を記念し、文化庁の支援を受けて、開催するものです。

法隆寺とその周辺の寺社や歴史、そして斑鳩の魅力を、斑鳩町文化財技師と、斑鳩町ゆかりのゲスト講師により、じっくりと伝えたいと考えています。

また、ご参加の皆様には、記念品として「わたしだけの斑鳩時間」を各回1部ずつお渡しさせていただくこととしております。

「わたしだけの斑鳩時間」は、斑鳩町の郷土史家・蔭山精一（かげやませいいち）さんの文章とデザイナーの坪岡徹（つぼおかとおる）さんのイラストによる、知る人ぞ知る斑鳩の歴史秘話を2話ずつペーパーにまとめたミニガイドで、全30編あります。

本日は、そのなかから、「旧・富郷村（とみさとむら）の大字・三井（みい）」「亀井勝一郎（かめいかついちろう）と法輪寺」をプレゼントさせていただきました。

それでは、全5回開催いたしますセミナーの、第1回目となります今回のテーマは、「斑鳩三塔～法隆寺・法起寺・法輪寺～」でございます。

本日の講師は、法輪寺住職 井ノ上妙康（いのうえみょうこう）様と、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課 参事で、考古学技師の平田政彦（ひらたまさひこ）技師です。

まず、最初に、法輪寺住職 井ノ上妙康様よりご講話いただきます。井ノ上住職、どうぞよろしくお願いたします。

<p>13 : 38</p> <p>法輪寺住職 井ノ上妙康 師 (以下、井 ノ上住職)</p>		<p>みなさま、はじめまして。</p> <p>法輪寺住職、井ノ上妙康でございます。</p> <p>本日はお暑い中、こんなにたくさんお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。</p> <p>ただいまのお話にありましたように、「斑鳩」というところは、聖徳太子様、そしてそのお子様の山背大兄王（やましろのおおえのおう）様といった、上宮王家（じょうぐうおうけ）ゆかりの土地でございます。その方々によって建てられたお寺が、今も法灯をつないでおります。法輪寺もその一つでございます。</p> <p>法輪寺は寺伝によりますと、聖徳太子の御子 山背大兄王様が、そのお子様の由義王（ゆぎおう）様とともに、聖徳太子様の病氣平癒を願って建立されたと伝えております。</p> <p>法輪寺のございますところは、斑鳩の中でも北方でございます。この「三井」と書いて「三井（みい）」というところがございます。この三井という名前は、聖徳太子様がこの斑鳩宮というお住まいをお建てになって、飛鳥からこの斑鳩へお住まいを移してこられました折、斑鳩宮から三井というところは大体1キロメートルほど北方になるのでございますが、そのあたりに太子様が、「赤染（あかぞめ）井」「前載（せんざい）井」「東（とう）井」という3つの井戸を命じてお移させになされた。そこでその井戸にちなんで「三井」という名が始まったといわれております。</p> <p>お子様の山背大兄王様方がお生まれになったときの産湯でございますが、その産湯に太子様（聖徳太子のこと）ゆかりの井戸の水を汲んで用いた、そういった伝承も伝わっております。</p> <p>山背大兄王様というお名前は、お父様の聖徳太子様に比べますれば、知られていないかと思いますが、太子様譲りの大変聡明な方であられたようでございます。</p> <p>聖徳太子様は、皆様の病氣平癒の願ひむなしく、病によってそのままお隠れになられます。49歳で亡くなられるわけでございますが、太子様没後は、この山背大兄王様が上宮王家の代表者としてご活躍が期待されました。実際、2度ほど有力な天皇候補として、お名前が挙</p>
---	--	--

がったわけですが、それが叶うことはありませんでした。山背王様（山背大兄王のこと）の即位を反対したのが、蘇我本家でございます。山背大兄王様のお母様は、当時でございますので、太子様には何人かお妃（きさき）がおられたのですが、山背大兄王様のお母様にあたる方は、刀自古郎女（とじこのいらつめ）とおっしゃって、蘇我馬子の娘でございます。ですから、山背大兄王様には蘇我氏の血は流れておりますが、上宮王家の人望の高さというのは、蘇我氏にとっては好ましくなかったようでございます。あろうことか、ついには従兄弟にあたります蘇我入鹿が山背王様を滅ぼしてしまう、そんなことに至ってしまいました。

西暦643年の冬、蘇我入鹿の兵が斑鳩宮を襲撃いたします。斑鳩宮というのは、法隆寺様の夢殿の場所にあったわけでございます。入鹿の襲撃の手をかりうじで逃れたご一族は、斑鳩の西の方に、「生駒の山」というのがありまして、現在では、奈良県と大阪府の県境になっております。今でも修験道の方が隠（こも）られたりして、いささか深い山なんですけど、その生駒に逃れていらっしゃいました。でも斑鳩と生駒の山は近うございますので、家来は一旦ここから京都の方へ脱出して、そして東国へ行って兵を興し、「入鹿と戦いましょう」ということをお勧めいたします。ところが、山背王様は、「ここで戦を起こせば入鹿を打ち負かすことはできるであろうが、戦を起こしてしまうと、一般の方々の平和を損なってしまう。人々の平和を損なうくらいであるならば、この命は入鹿にくれてやろう。」とおっしゃいまして、不戦を決意なさいます。そして再びこの斑鳩へ帰ってこられまして、山背王様はじめ、小さなお子様に至るまでことごとくご自害して亡くなられた。そういうご最期でございました。

643年の2年後の645年、大化の改新がございまして、乙巳（いっし）の変と今日申すようですが、蘇我本家が滅ぼされるという、本当に血で血を洗うような時代だったようです。

聖徳太子様のご生涯を絵で描きましたものを、「聖徳太子絵伝」と申しまして、皆様もご覧になったことがあるかと思います。年代で申しますと、聖徳太子様のお母様が夢に金色の僧をご覧になって、その

金色の僧が「私は世を救う願いがあるので、しばらくあなたのお体をお借りしたい。」とおっしゃって、口から飛び込まれて、その夢を見て、聖徳太子のお母様は懐妊なさるわけですが、そこに始まりまして、最後は聖徳太子様のご逝去で終わるのではないのです。今申しました、上宮王家の昇天、法隆寺様の五重塔で亡くなられたという伝承がございますので、五重塔のお屋根が描いてございまして、そこから何人かの方々がふわふわと昇天していらっしゃるシーン、これが上宮王家の滅亡、そこで終わるわけでございます。ですから、お名前はあまり知られておられない山背大兄王様でございますけれども、太子様、そして太子様の和の精神を身をもって実践なされた、お子様の山背大兄王様というのは、どうも太子に劣らない尊敬を集めてこられたようでございます。

法輪寺のあるところを三井と申しましたが、三井の農家の方は、山背王様のお墓と伝わる「岡の原」というのがございまして、その岡の原に向かって、「山背王様が身を捨てて人々の平和をお守りくださったので、今日私たちこうして安心して農作・農業をしておられます。」と言って、大変、山背大兄王様に心を寄せておられるわけでございます。

では、斑鳩三塔について申し上げたいと思います。建築的な難しいことは、いささか私には大任過ぎますので、かろうじて知っていることを申し上げたいと思います。

まずは、法隆寺さんにお参りになられてから私どもへお参りくださる方が多いのですが、五重塔がありますのが、法隆寺さんの西院伽藍でございます。西院伽藍で五重塔、金堂を拝まれたあと、夢殿の方の東院伽藍にいらっしゃいまして、そして夢殿の御門を出られますと、右に曲がり、道なりに北へ北へとおいでいただきます。やがて池のほとりに出るわけなんです、その池は先ほど申しました、入鹿の上宮王家襲撃の折、兵隊が血刀を洗ったという伝承がございますところから、「刀池（かたないけ）」といわれる池なんでございますが、その池を巡ってふと正面をご覧くださいますと、法輪寺の三重塔がお目に入ります。その手前に古墳などがありまして、なかなか山陰



で見えないんですが、「かたないけ」をぐるっと回ると、法輪寺の塔が見えております。法輪寺に向かってそのまま北進していただきますと、やがて右手はるかかなたに、法起寺様の三重塔がある。そういう風に斑鳩をたどっていただくわけでございます。春でございますとカエルがケロケロ、今でございますとセミがワンワン鳴いておりますので、そういった音を聞きながらお歩きいただくわけでございます。

斑鳩三塔は、本当によく似た、共通した特徴がございます。まず、柱の形は胴張りがある円柱、どういうことかといいますと、丸い柱の上がすぼまり、足元も少しすぼまりがあり、真ん中より少し下がりましたところが一番膨らんでいる。こういうのを胴張りのある円柱と申します。上下に狭まり、胴張りがあるというのが、1点目でございます。

2点目は、柱の上には「大きな斗（ます）」と書いて「大斗（だいと）」というものが乗りまして、そこに部材が組まれるわけですが、大斗に組まれて軒を支えますものが、「雲形肘木（くもがたひじき）」という形のものなんです。実物を見ていただくと「あ、これか。」と思われると思いますが、斗（ます）と肘木（ひじき）が合体して、なおかつ空の雲の形を表している、昔の方はご覧になったようですが、雲形肘木が大斗に組まれて軒を支えている。これが2点目でございます。

それから3点目。軒の裏をご覧になりますと、垂木がお目に入るわけですが、その一本の長い垂木が軒先から塔の中へ、塔身に向けて平行に用いられておりまして、普通、塔のような建物になりますと、「二重垂木」という形になるわけなんです、一本の長いものが平行に使われている。これを「一重垂木」、また「一軒（ひとのき）」と申します。

胴張りのある円柱、雲形肘木、一重垂木、これが法隆寺五重塔、法起寺三重塔、法輪寺三重塔に共通するところでございます。

法隆寺の五重塔の初層（一番低いところ）と三層と五層、これを持ってきたのが法輪寺の三重塔の初層・二層目・三層目にあたりまして、最上層の塔身が、初層の上が半分ということで、非常に安定感がある

というのがこの斑鳩の塔に共通しております。ですから、遠景の写真をパッと見たところでは、なかなか見分けがつかないんですけれども、見分け方をここで申し上げたいと思いますので、斑鳩にいらっしゃったらお試しになってみてください。

まず、法隆寺様の五重塔は「5つあるからすぐにわかる」と思われるかもしれませんが、下の方は木に隠れましてなかなか見えないのでございます。一番上の屋根の下のところ補助の柱、これが後世につけられまして、最上層の屋根の下にこういうのがついている場合は、法隆寺の五重塔と分かるわけです。

さて、法起寺様の塔と私どもの塔は本当によく似ておりますが、区別のつけかたといたしましては、相輪の形です。相輪というのは、屋根の上の金属の部分でございまして、水煙の形とか風鐸の有無とか、そういう違いがございまして、また塔身の部分に板壁があるのが法起寺さんでございまして、斑鳩の方はその区別は知っておられるんですけども、水煙をじっくりと見ていただくとお分かりいただけると思います。

ここで私は秘密兵器を持ってまいりました。これは何かと申しますと、三重塔に用いられている風鐸でございまして。構造は風鈴と同じでございまして。側があつて中に舌（ぜつ）があつて、風が吹きますと、こんなあんばいに音が鳴ります。この音は、今日はこちらへ持ってまいりましたが、斑鳩においでいただきますと、夏の風、秋の風、冬の木枯らし、春風にコロコロと鳴りますので、「今日は風鐸が聞けた。ラッキーでした。」とおっしゃって帰られるお方がおられますので、皆さん是非この風鐸の音を聞いてください。風鐸の音が聞けるのは、法隆寺様と私どもだそうでございまして。風鐸の小さいのが、今お見せしたこれが相輪の部分についております。76個ございまして、軒先に下がっております大型のものは、また12個ございまして。

法輪寺三重塔のことをこれからご案内したいと思います。江戸時代の初め、正保2年（1645年）の大風によって三重塔の三層目が飛ばされて、諸堂は倒壊したという言い伝えがございまして。ですから仏様がおられますので、その倒壊したお堂の材を使い回してと思われまますが、仮堂を建てて仏をご安置する、そういう時代が100年ほどあ

ったようでございます。宝暦のころ、1760年前後に金堂の再建、講堂の再建、そして三重塔の修復というのが行われました。

〔旧三重塔の写真を見せながら〕

現在あちらにありますこの塔が明治36年に解体修理を受けましたあとの塔の姿でございます。この塔は、実は昭和19年7月21日、落雷によりまして炎上いたしました。全焼いたしまして、その無残なお写真、無残なことでございますので、めったにお見せしないんですが、

〔焼失した三重塔の写真を見せながら〕

今日はここにお目にかけるためにこちらにございます。塔というのは意外とがっちりした構造でございますので、まだこれはかろうじて初層が残っております。でも金属の部分に雷が直撃いたしましたので、心柱がバキッと折れたようになりまして、隅のところにもたれかかっておりました。焼け落ちた状態がこれでございます。手前に基壇が見えておりますのが、金堂でございまして、ここには国宝の仏様がおられました。類焼寸前だということで、みんな寄って仏様を運び出してくださいなんですけれども、昭和19年ということで男の方はみな兵隊に行っておられました。ですから男手がない。でもみんな寄ってなんとか、火事場のなんとかと申しますが、運んでいただいたんですけれども、奥に見えております、北側にありますのが庫裏（くり）なんです。また西側には三井の村がございまして、どちらに倒れても大変な被害が起こるところだったんですけれども、祖母の話によりますと、最後塔は、人が膝をついて座るようにぐしゃっと屋根は下に崩れ、頭を講堂と金堂の間に突っ込むようにして倒れました。それがこの状態でございます。目の前で千数百年護持されてまいりました塔を失いました、その時の慶覚（けいかく）住職の心中いかばかりであったろうかと思えます。昭和40年ごろから再建が始まりますが、再建を発願した理由の一つはお釈迦様のお骨、仏舎利を奉安するのが塔なんですけれども、それが無事に拾得できたからでした。

〔拾得した仏舎利の写真を見せながら〕

小さいものなのですが、これが錦の袋に包まれまして相輪の部分に納まってたようなんです。それが落雷の衝撃で飛び出しまして、木の根方に落ちておりましたそうなのですが、それをたまたま拾ったのが、私の父親でございまして、その時小学校5年生でございました。何か尊いものがあるなというので、父であります住職に見せましたところ、中から仏舎利が出てきた。ポコッと雪だるまさんみたいにこぶが出ておりますが、こういう形のお舎利さんを「子持舎利（こもちじゃり）」というそうでございまして、このお舎利が出てまいりましたということ、ある立派なお坊様に申しますと、「これは二代の住職でできるということや。必ず再建できる。がんばりなされ」という激励を頂戴したそうでございます。

昭和40年に再建が始まっていくわけでございますが、慶覚という、私から言いますと祖父にあたりますが、老僧という大変厳格な、重々しい人でありまして、その「顔」で皆さん協力してあげようということだったんですが、祖父が昭和44年9月に亡くなってしまいます。癌でございました。そのあと受けましたのが私の父親 康世（こうせい）で、弱冠36歳でした。30代の坊さんといえば、まだまだ若造でございます。大変物価が高騰していく時代でございまして、もうこの塔は、材木は購入したけれども再建は無理ではないかとささやかれた時期がありまして、そんな折に大変な賛助をくださいましたのが、幸田文（こうだあや）先生なんです。幸田文先生というと、みなさん東京のお方ですからよくご存知かと思いますが、お父様の露伴先生は、弱冠25歳の時に『五重塔』という名作をお書きになられました。そのモデルになっているのが、谷中（やなか）のお寺様の塔でございます。ですから、法輪寺とは全くご縁がなかったわけなんです。『五重塔』という本をお書きになられましたので、幸田家にはその印税が入ってくるわけでございます。幸田文先生のお言葉を借りますと、「私は塔を食べてきた」と仰せなんです。塔に対して一方ならぬ思い入れがあったわけなんです。実は露伴先生の五重塔は、昭和32年に

心中事件の巻き添えで焼け落ちております。ご存知かもしれません。「露伴先生の五重塔が焼けていますよ」ということを電話でお知りになった文先生は、駆けつけられて、谷中の塔の燃えていく様をまざまざとご覧になったそうなんです。そうこうするうちに岩波書店さんを通じまして、法輪寺の三重塔が木造で創建当初の形で再建するということがお知りになりまして、訪ねてくださったのが最初でございます。あの老僧ならばなさるだろうと思っておられましたところ、慶覚住職が亡くなったということをお聞きになって、塔はまだ建っていないということをお知りになりまして、塔再建に奔走していただくことになるわけなんです。講演でお話くださる、新聞や雑誌に寄稿して下さる。そればかりでなく、ご寄進のお願いにもあがっていただきました。東京と斑鳩を往復してくださったんですが、一時、1年余りは斑鳩に仮住まいまでして下さって応援をいただいたわけなんです。三重塔再建のことを、幸田先生のお話を通して、また新聞やテレビで知りましたという方がさらにご支援をくださりまして、もうこの塔は建たないだろうと言われたことだったんですが、無事に再建することができました。文先生は、何枚も着物の裾を擦り切れなされた。これはお嬢様の玉様からのちに伺ったことでございます。

幸田先生という大きなお方もありますけれど、もちろんこの地元の斑鳩の方もご賛助くださいました。旧のお方ばかりではなく、斑鳩というのは大阪のベットタウンでございまして、新興のお方も多いんですが、そういったお方の中に、「斑鳩を愛する会 ぽっぽ」というのがございまして、その会の方も働きかけてくださり、本当にたくさんの、2万人を超える全国の方のご支援によりまして、昭和50年に再建となったわけでございます。

〔再建中の塔と人々の写真を見せながら〕

これがある日の法輪寺でございます。ニコニコ笑っておりますのが、父親 康世でございます。その前にヘルメットを被っておられますのが西岡常一（にしおかつねかず）棟梁。私どもの三重塔は西岡棟梁が総棟梁でございます。その前に柔和なお顔をしてなさいますのが、設計

の竹島卓一（たけしまたくいち）博士でございます。父の隣の女の方を一人挟んでこちら（右）にいらっしゃるのが小川三夫（おがわみつお）さん。今は、西岡さんの後継者として頑張っておられます。白い服を着て座っていらっしゃいます方は埼玉出身の藪島芳生（はいしまよしお）さんなのですが、今奈良でやはり宮大工をなさっておられて、柳生の円成寺様の多宝塔などを建てておられます。足元にわたくしっておりますのが垂木でございます。

〔再建された三重塔の写真を見せながら〕

これが再建になったばかりの三重塔なんです。中はやはり壁を塗ったりしておりますので、乾燥させるために、扉の下にくさびをかまして風を通してあります。相輪も今はくすんでありますが、キラキラと真新しい姿を表しております。もともとは金色でございました。

〔薬師如来坐像の写真を見せながら〕

先ほども申し上げましたが、塔の落雷のとき、あんな大きな火事でございますので、仏さんもみんな燃えてしまったと思われる方があるんですが、実は金堂の仏様は外へ出してくださいましたし、金堂も結局類焼しなかったんです。ですから、塔の中の数体の仏様、『大和古寺風物誌』に出てくる仏様、夢違観音様とか、お地藏様とかは火とともに、塔とともに命を終えられたんですけれど、旧国宝、今は重要文化財なのですが、あとの仏様は無事でございます。こちらが本尊の薬師如来様。飛鳥時代の木彫の如来像としては、現存最古と言われてまして、止利仏師の作という伝承がございます。

〔虚空蔵菩薩立像の写真を見せながら〕

こちらが虚空蔵菩薩様。百済観音様とようよう似ておられます。同じく薬師様も虚空蔵様も楠でつくられ、当初は彩色像でありましたんですが、このお二方が創建当初からのお像でございます。

〔十一面観音菩薩立像の写真を見せながら〕

		<p>真ん中に大きな、4メートル近い十一面観音様がおられまして、こちら平安時代でございます。「くわんのん の しろき ひたひ に やうらくの かげ うごかして かせ わたる みゆ」。會津先生の歌われた観音様は、この十一面観音様でございます。今、仏像は収蔵庫の中に一堂にご安置しておりますので、お参りいただきますと目の前にずらっとおられますので、「近い」「大きい」という形容詞を頂戴するんですけれども、また間近でこういった仏様を拝んでいただければと思います。</p> <p>ご清聴誠にありがとうございました。風鐸の音を聞きにいらしてくださいませ。</p>
14 : 04	藤江	<p>井ノ上住職、ありがとうございました。</p> <p>続きまして、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課 参事で、考古学技師の平田政彦（ひらた まさひこ）技師による講義です。</p> <p>平田技師、どうぞよろしく願いいたします。</p>
14 : 04	考古学技師 平田政彦 (以下、平田)	<p>〔レジュメ表紙（1ページ）〕</p> <p>ただいまご紹介にあずかりました斑鳩町教育委員会で文化財を担当している平田と申します。よろしく申し上げます。</p> <p>本日、このように多くの方々にお集まりいただいておりますが、昨日東京へ入らせていただいたら、なんとなく空気が変わって秋めいたところもありましたが、今日歩くとやっぱり暑いなというところで、このように集まっていたいただいて、ありがたく思っております。</p> <p>先ほどご紹介いただきましたように、私は考古学の技師をしております、今は管理職というたいそうな肩書がついておりますが、斑鳩町で約30年間ぐらい発掘調査の最前線で歴史の掘り起こしを行ってまいりました。平成12年から法輪寺のご理解、ご協力のもと、境内を掘ることができました。法隆寺は、皆さん一度は行かれておられると思いますが、色々な機会において発掘もされていて、解明も進められているのです。先ほど世界文化遺産活性化というような名称でこの事業もさせていただいておりますが、実は世界文化遺産というのは史</p>

跡になっているところが「コアゾーン」と言ってメインエリアになります。法隆寺と法起寺とでコアゾーン。それから「バッファゾーン」という緩衝地帯みたいなところがあって、法輪寺はここに入っているのですが、両寺の真ん中でコアゾーンにはなっていないのです。そこで、将来のコアゾーンに追加されるように史跡指定の準備も整えるべきであろうといったときに、法輪寺がどういったお寺なのかということが、調査報告書も出ていないため、わからなかったわけです。歴史に詳しいお方でしたら、石田茂作先生という仏教考古学の権威の先生を知っておられると思いますが、その先生が戦前に『飛鳥時代寺院址の研究』という本をお書きになって、戦後の本当にごたごたしている頃ですが昭和25年に、少しは援助をいただいたお金を使っておりますが、ほとんど手弁当で境内を発掘することがございました。法輪寺には、写真とか詳細な記録が残されているのですが、そういうものが公になっていないということがございましたので、文化庁の補助金を受けて、斑鳩町の方で学術調査をしようということで、発掘調査をさせていただきました。

本日は、なかなか難しい専門用語もありますが、なるべく易しく、発掘調査の成果のどういったところが、法輪寺の歴史と結びついてくるのかといったところを、皆さんにご紹介していきたいと思っております。

#### 〔法輪寺の地理的環境（レジュメ2ページ）〕

はじめに位置関係です。「西院伽藍」というのが、いわゆる法隆寺です。今日の話の中心にはなりません、元々聖徳太子がお建てになった法隆寺は「若草伽藍跡」というところです。法隆寺の南東の方向にあります。黒い印をして何も書いていないところが、「夢殿」で、斑鳩宮跡があったとされるあたりです。そこから500メートルほど東側に「中宮寺跡」。斑鳩町が整備をしまして、今年グランドオープンをした広々とした公園になっております。聖徳太子ゆかりの寺院の整備ということで、関心のおありの方は是非寄っていただきたいと思っております。聖徳太子のお建てになった男性のお坊さん、僧のお寺が



この法隆寺であって、女性のお坊さんである尼のお寺として、中宮尼寺があります。その北方に今日の話の中心になります法輪寺と、世界文化遺産の法起寺が並んでいます。ですから、せいぜい2キロメートル四方もないような範囲内に4つの古代寺院があるということで、飛鳥とならんで斑鳩という所が、飛鳥文化の中心地のひとつであったということがわかっていただけるかなと思います。この位置関係を覚えておいてください。

現代の航空写真に位置を落としますと、先ほどご住職のお話に出ていました法輪寺のあるあたりが「三井」というエリアで、法起寺のあるあたりが「岡本」というエリアです。そのエリアの間には瓦を焼いて供給していた「史跡三井瓦窯跡」、二つの寺の中心あたりに「岡ノ原」という山背大兄王のお墓だと言われ、宮内庁が陵墓参考地という形で治定されております。しかし、ちょっと時代的に合わないのかなと思っています。

近年亡くなられた成城大学名誉教授の上原和先生が、岡ノ原との関係を法輪寺と法起寺を見渡せるところということで重視されてきました。「一度、平田君と行きたい。」とおっしゃられていたんですが、体の調子を悪くされて、実現しないままお亡くなりになりました。

〔法輪寺（別名：三井寺、御井寺）（レジュメ3ページ）〕

先ほどからお話に出ている「三井」には井戸（国史跡三井）があります。法輪寺から歩いて1分ほどのところにありますので、ぜひ井戸をのぞいてみてください。今日は詳細をお話をしませんが、井戸の下の方は水位が下がると見えるのですが、「埴（せん）」という土で作った瓦製のタイルみたいなものがあります。そういったものが扇形につくられていて、それを並べていくと真ん中に円ができるわけです。それが井筒のようになっているという特殊な構造なので、昭和の初め頃に調査されて、昭和19年には国の史跡になっています。

三井の瓦窯はこのような形です。天井に穴があいていて、写真には階段が見えていますが、ここに瓦を並べて焼きます。もちろん焼く時にはドーム状に屋根があったわけですが、戦前に発掘されて、残り具

合がよく珍しいということで、すぐに史跡になっています。こういった史跡が法輪寺の近くにあります。

先ほどご住職さんからご紹介がありましたので、仏像につきましては詳しく喋りませんが、「薬師如来」というのだけを覚えておいていただければと思います。

次に、発掘調査の成果ですが、お寺に入るところに中門があつて、左手に塔、右手に金堂、そして奥の方に講堂という配置ですので、いわゆる「法隆寺式伽藍配置」というのが、現在においても確認することができます。

〔文献史料に見る法輪寺の創建説（レジュメ 4 ページ）〕

ここから、私は考古学が専門なので専門外となりますが、文献についても見ていこうと思います。

『聖徳太子伝私記』という文献がありまして、そこに引用されているのが、「山背大兄王が、その子どもの由義王とともにお寺を建て始めた。それはなぜかというと、聖徳太子の病氣平癒を願ってである。」という記述が出ています。系図にありますように、聖徳太子の息子で長男の山背大兄王がおられて、山背大兄王と舂米（つきしね）女王との間に皇子が何人かいるわけですが、その中の一人の由義王とともにつくったという伝承があります。

『聖徳太子伝私記』は、鎌倉時代に成立したのですが、平安時代に成立した『上宮聖徳太子伝補闕記（じょうぐうしょうとくたいしでんほけつき）』という文書がありまして、聖徳太子および法隆寺といった斑鳩の歴史を知るには重要な文書となっております。この『上宮聖徳太子伝補闕記』を見ますと、「斑鳩寺災いす。その後、衆人、寺地を定めることを得ず」という記述があります。斑鳩寺が燃えてしまったということですが、この話を詳しく喋ると1時間以上かかるので本日はお話しできませんが、『日本書紀』に出ております、「天智天皇九年（670年）に法隆寺が燃えてしまった」という記述があるわけです。このことを受けて、寺の関係者が「どのようにしたらいいだろう」という悩んでいる姿が書かれていて、そうしたときにいろんなお

寺をつくるという挿入記述があるわけですが、「百濟聞師、圓明師、下氷居雜物等三人合造三井寺（くだらのもんし、えんみょうし、しもひいのぞうぶつら、三人合わせて三井寺を造る）」という記述があります。先ほど言いましたように、三井寺は法輪寺のことです。

では、法輪寺が聖徳太子ゆかりの寺院であるのに、なぜこの2つの創建説があるのかということが謎になってくるわけですが、発掘調査の結果、これらについて明らかになったことがあります。

〔法輪寺の出土瓦（レジュメ5ページ）〕

こちらを見ていただきたいと思います。

私は、今では飛鳥時代や奈良時代の瓦を中心に論文を書いています。が、大学院では古墳を研究していましたが、「斑鳩」となると、どうしても避けられないのが瓦の研究なのです。出土瓦を研究するなかで気付いたのが、「船橋廢寺式」と言われている軒丸瓦で、作りとしては少し質素な感じを持つかもしれませんが、これが境内の中から一定量出土します。そして、それに合う軒平瓦も出土します。

軒先を飾る丸い瓦を「軒丸瓦（のきまるがわら）」、平らな方を「軒平瓦（のきひらがわら）」と言いますが、基本的にはこれがセットになるわけです。このセット関係が生まれたのが、実は法隆寺なんです。その法隆寺で軒丸と軒平のセットがつくられた後にだんだん進化していった、文様がいろいろとつくられるのです。

今申しましたこの質素な感じの「素弁」と言われているものが一定量出るということは注目されていました。そして、発掘調査をしてまいりますと、この「素弁八弁蓮華文軒丸瓦」のつくり方を見ると、古いタイプと新しいタイプがあって、新しいタイプのものは、山背大兄王が亡くなられてからのものかもしれないというところはあるのですが、古いタイプの方は、ちょうど山背大兄王がおられたころの瓦であるというのがわかり始めました。「重弧文（じゅうこもん）軒平瓦」についても、種類がいくつかありまして、古いタイプは630年代くらいのもので考えました。

こちらの大きい方の写真が、いわゆる「法隆寺式」の軒丸瓦です。

「複弁」と言って、弁がふっくらしたところに2つあるので「複弁」と言います。これが8弁あって蓮華の花を上から見たような姿をしているわけです。そして、これに組み合わさるのが、「均整忍冬唐草文（きんせいにんどうからくさもん）軒平瓦」と言って、すごく美しい軒平瓦です。法隆寺で誕生し、それがどんどん拡散していきました。現在、皆さんも古いお家でしたら見たことがあると思いますが、棧瓦にも見られる「唐草文」といった文様の源流がどこにあるのかというと、ここ法隆寺の軒平瓦なんです。文様の真ん中に宝珠があって、きれいなつぼみが描かれているものが少し古いタイプで、新しいタイプになると、中心飾りが花形になって、つぼみが矢印のようになって簡素化されますが、この2つのタイプの軒平瓦が法輪寺から出土します。それと組み合うのが、一番古いタイプのものから少し時期が新しくなった法隆寺式の軒丸瓦です。

ここで何が言いたいかというと、先ほど文献の中で2つの創建の話があるというお話しました。古い方は山背大兄王が聖徳太子の病気が治るよにと言うことで建てたということでしたが、ちょうどそのころの時代に合うのが、素弁八弁蓮華文（船橋廃寺式）軒丸瓦のタイプ。そして法隆寺が燃えた後、「衆人、寺地を定めることを得ず」ということで、法隆寺が燃えて仏様をどう祀ったらいいかと悩んでいた時につくられたのが、複弁八弁蓮華文（法隆寺式）軒丸瓦の方ということで、ちょうど考古学の発掘調査の成果と文献の成果が一致するということがわかりました。

そうしたなかで気になったのが、瓦に時々押されているスタンプです。「池上」と書いて「いけのへ」と読みます。「王井」と書いて「おうい」、これはおそらく三井に関係するのでしょうか。「木」という字、次はわからないですが「国」の異体字のようなものがあります。こういった押印をするようなものは、実は法隆寺では出土していません。7世紀後半の時期のどの寺院にもごさいません。ですから、日本で最初の刻印瓦ということがいえると思います。関東では有名なところは、府中の武蔵国分寺とか、群馬県まで行きますと上野国分寺とか、そういったところでは、郡に瓦をつくらせるまたは寄進させる瓦を割り当

てて、そこから調達する際にスタンプを押されたり、文字をスタンプのように押ししたりというものが多く出土しますが、そういったようなものに近いのではないかというのを予感させました。つまり、何らかの意味があるから刻印を押さないといけないのだろう、その理由をどう理解すればいいかと思ったときに、今でもされたことがある方がいると思いますが、「寄進瓦」という考え方です。つまり、自分の財産（浄財）を出してつくらせた瓦を寄進することによって、お寺づくりに参画するといった意味合いを感じたのでした。ですから、このスタンプを押された意味合いは、仏教用語で難しいですが、「知識（ちしき）」ではないかと考えました。

〔法隆寺の線刻画瓦（レジュメ6ページ）〕

この「知識」を裏付けるような話として、線刻画瓦（せんこくががわら）というものがあります。よく「戯画」や「戯書」というものがありますが、法輪寺のはそういった類ではございません。「初めは、三角や四角の絵が描いてあって、屋根みたいだがよくわからないな」と思っていたんですが、よくよく考えると金堂の一部だとわかりました。そこに表現されている柱も、7世紀後半になりますと、建築で代表的な建物としては、「薬師寺」という奈良県の西ノ京にある寺がありますが、絵の柱はエンタシスではなく、先に行くとき少し細くなっている柱で表現していて薬師寺と同じになっています。こちらの「塔相輪部」と思っている線刻画瓦は、ゲジゲジとかムカデのような感じですが、塔を見た時に皆さんが初めに何をイメージするかというと、確かに大きな建物ということはイメージしますが、実は、塔を意味するのは元々「ストゥーパ」というお釈迦さんのお墓ですので、一番上にあるのが相輪の部分をイメージするようです。ですから、塔の象徴とするものは、相輪の部分なのです。ですから、私はこれはおそらく相輪の部分を表現したのではないかと考えています。「蓮」の線刻画瓦は、蓮の華を横から見たものです。このように、これらはすべて仏教的な素材が描かれているので、「知識」によるものだと考えたわけです。

「知識」については、最終的には浄土に導いてもらうということ

期待しているのですが、仏教のありがたい考えに賛同して、お寺づくりやお寺をつくるお坊さんの活動に参画する集団のことを「知識層」や「知識」と言い、奈良時代の東大寺をつくる時に参画した行基の「知識集団」は有名です。私は、7世紀の後半には既に「知識」が日本の仏教の中では成立していたのだらうと思っています。

法隆寺が、国や豪族の知識活動の一部によって建てられるのに対して、法輪寺はどちらかというと国というよりは僧や中小豪族、もしくは一般の識字層の方々が参画したのではないかなと思っています。そういったところが、法隆寺と法輪寺との違いではないかと感じています。ですから、先ほどの刻印は「知識」が参加することによって、何らかの意味合いがあって押すのではないかと思っています。ですから、見やすいところに押してあるというのがポイントです。

〔平成29年の法輪寺鉄製舍利孔蓋の発見（レジュメ7ページ）〕

最近のトピックス的な話題も紹介しておきたいと思います。

法輪寺三重塔が再建されるにあたって、昭和47年に奈良国立文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・奈良国立博物館という、奈良のトップ3の機関で合同調査をしております。

（法輪寺三重塔 塔心礎の写真を見せながら）塔の地下の一番下のところに「塔心礎」があります（地下式心礎）。ここに舍利を納める穴「舍利孔」があって、国の重要文化財である銅壺（大和法輪寺塔心礎埋置銅壺）が納められていた孔があります。その外側に丸い彫り込みがありますが、その穴の蓋の所在がわからなかった。ではなぜ、そこに蓋があるというのがわかるのかというと、江戸時代に記された『仏舎利縁起』というのが法輪寺に伝わっていて、国の重要文化財にもなっていますが、『仏舎利縁起』に「金蓋（舍利孔鉄蓋）」が描かれています。ある時、「『仏舎利縁起』に描かれている金蓋（舍利孔鉄蓋）などは、どこかにいってしまったんでしょうか。」というようなお話をお寺にいたしましたら、「それらしいものがありますよ。」というようなお返事があって、寺の蔵から出してきていただきましたら、まさしく『仏舎利縁起』に描かれている、お盆に載った「金蓋（舍利孔

鉄蓋) 」だったのです。これは、あとで奈良文化財研究所で調べてもらおうと、鉄製であるということがわかったので「舍利孔鉄蓋」という言い方をしています。これが260年以上前から寺に伝わっていたということがわかりました。そこで、とても重要な成果だということで報道発表をしたら、各新聞にも取り上げていただいて、これを初めて展示をした時には、たくさんの人に見に来ていただきました。

この火炎型の舍利容器ですが、先ほどの住職さんがご講演でお示しになっていた、落雷を受けた時におそらく飛んだんだと思います。そして金堂の近くに突き刺さるように落ちていたので、中の御舍利は無事だったということです。

このような重要なものが見つかったということで話題になりました。

[レジュメ8ページ]

法隆寺西院伽藍の五重塔の下も、秘宝の調査ということで調査がされていて、皆さんあまり見る機会はありませんが、調査報告書も出ています。五重塔の下の方に空洞があって、その下に塔心礎があって、銅の蓋を開けるとその中に舍利容器があって、銅椀があって、海獣葡萄鏡が入っています。そして鎖で縛られた容器があって金銀銅の容器がマトリョーシカのようになっていて、最後は銀で蓋をした緑色のガラス瓶が入っていたことが、昔の調査でわかっています。

法隆寺は銅の蓋でしたが、法輪寺は鉄の蓋ということです。

茨城県の結城(ゆうき)廃寺では、舍利孔石蓋が見つかっています。裏を見ると蓮華文が描いてあったので、法輪寺のものも調べてもらいましたが、そういった彩色はなく、鉄板そのものだったということがわかりました。

[法起寺の建立(レジュメ9ページ)]

法起寺の建立について簡単にふれておきます。「法起寺塔路盤銘文」というところを調べていきますと、舒明天皇10年の638年、つまり山背大兄王の頃に、弥勒菩薩をもって金堂を建て始め、塔は天武天皇14年の685年に建て始め、慶雲3年の706年に完成したとい

<p>14 : 32 藤江</p>	<p>うことが書いてあります。「法起寺塔路盤銘文」は『聖徳太子伝私記』に書いてあります。</p> <p>法輪寺の歴史は、この法起寺と同じ歴史をたどるのではないかと思います。つまり、山背大兄王が舒明天皇10年の638年あたりに法輪寺の前身のお寺を建て始め、法起寺も尼の寺として建て始めた。法起寺がなぜ尼の寺と考えたかという、「岡本尼寺」という言い方があります。法隆寺・中宮寺・法輪寺・法起寺の位置関係にお話をしましたが、聖徳太子が建てた法隆寺と中宮寺の関係、そのまま北へ向かっていくと、山背大兄王がお建てになった僧の寺・尼の寺が法輪寺・法起寺ではないのかというのが、私の論文の骨子になっております。</p> <p>〔レジュメ10ページ〕</p> <p>会場玄関のところにもポスターを貼っておりますが、9月2日まで、法隆寺ゆかりの都市文化交流協定締結1周年記念「法隆寺食封で結ばれた文化交流展」をやっておりますので、関東地方では、小田原市と高崎市の資料をお借りして展示しておりますので、今日のお話を聞いていただいて、斑鳩に興味がある方があれば、ぜひ来ていただいていただければと思います。</p> <p>ご清聴ありがとうございました。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>舞台転換を行います。しばらく、お待ちください。</p> <p>このお時間をお借りしまして、私より、本日、配布しております資料のうち、「奈良・斑鳩 竜田揚げ食べ歩きマップ」について、ご説明させていただきます。</p> <p>みなさん、竜田揚げは、お好きですか？鶏肉などを醤油やみりん、しょうがなどに漬け込み、片栗粉をまぶして揚げた唐揚げを「竜田揚げ」と呼びます。この竜田揚げの語源は、斑鳩町を流れる、もみじの名所・竜田川に由来します。</p> <p>揚げたときに醤油の色が赤くなり、ところどころに片栗粉が白く浮かぶようすが、もみじが流れる竜田川に見立てられたところから、そ</p>
-------------------	---



14 : 34	平田	<p>の名前がついたと言われます。</p> <p>竜田揚げで斑鳩町を盛り上げようと、斑鳩町商工会青年部の有志のみなさんが、PR活動をしており、斑鳩町の多くの飲食店で、竜田揚げを提供しています。みなさん、是非、斑鳩の里で、竜田揚げの食べ歩きをしてみてください。</p> <p>それでは、準備が整ったようです。</p> <p>最後に、法輪寺住職 井ノ上妙康 様と、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課 参事で 考古学技師の平田政彦技師による対談をお楽しみください。</p> <p>よろしく願いいたします。</p> <p>早速ですが、今回の第1回目は、法輪寺のご住職さんとの対談という形でお話しさせていただいて今日のセミナーのまとめをさせていただいたあと、ご質問タイムもありますので、ぜひ、どしどし質問していただければと思います。</p> <p>井ノ上住職さんの方で、言い足りなかったことや、追加で説明をしておきたいといったことはございますか。</p> <p>また斑鳩へいらして、「あのときの話でこうだったのは、どうですか。」とおっしゃってください。</p> <p>ちなみに、法輪寺に行かれた方はどのくらいいらっしゃいますか。</p> <p style="text-align: center;">～たくさんの受講者が挙手～</p> <p>すごいですね。ありがとうございます。</p> <p>たくさん行っておられるらしいですよ。</p> <p>お堂で船を漕いでいたのをご存知かもしれませんね（笑）</p> <p>また、今度もおいでくださいませ。</p>
	井ノ上住職	
	平田	
	平田	
	井ノ上住職	

平田		<p>時々、ご住職さんもお堂でお番をされておられますので、お話を直接ご住職さんから受けることもあったかと思ひますし、また行かれたときには、お話を聞く機会もあろうかと思ひます。</p> <p>それでは、法輪寺の歴史の中でも、それほど昔ではなく、先ほどのお話にもあったように、一番ドラマティックな出来事と言ひえ、やはり三重塔の再建かなと思ひわけです。井ノ上住職さんが先ほどお話しされておりましたように、おじい様の慶覺和上様とお父様である康世住職ですが、どういった人柄なのかということについて、ご住職さんの方から願ひします。</p>
井ノ上住職		<p>祖父は、やはり明治生まれでございませうので、私、孫から見たら、独特の、気難しいお坊さんという雰囲気でもございませうでしたが、孫には甘々でもございませう。高野山を中退いたしまして、日大の宗教というところに行っておりましたので、下宿のときに関東大震災に遭ったそうでもございませう。祖父が三重塔の勧進のときに、これと思ひておいたのが「書」でもございませう。元々、字をよくしておりましたが、揮毫（きごう）は再建募金の手段でもございませうして、例へば、三重塔の焼けた材の表面を剥きますと、中が健全でもございませうので、それで百万塔をくつていただいて、その百万塔の箱書きをいたしましませうたり、また色紙を書きましませうたり、掛け軸を書きましませうたり、それがみんな塔へご寄進という形で還っていったわけでもございませう。そのときの持ち主の方が故人となられますと、今日、オークションにお出しになるみたいで、時々「法輪寺管主 慶覺というのはどなたですか。」というお問い合わせがあつたりいたしましませう。病床にありませうしても、肺癌でもございませうしたので、何か月か休んでおりましたが、「今度はもっとええ字が書けそうや。」と空中に指で字の練習をしておりました。再起を決して、また勧進に励もうと思ひておいたようでもございませう。</p> <p>何よりも祖父は、聖徳太子様を尊敬しておりました。明治の人は自然なのかなと思ひんではございませうが、塔が焼けましたあとの始末書みたいなのを読みませうと、「塔を再建して太子の教えを世に広めるのを使命と</p>

		<p>考えている。」という一文が出てまいりました。斑鳩のお年寄りの方は「聖徳太子」を「お太子さん」とおっしゃるんです。祖父の世代では、単なる歴史上の偉人ではなく、身近な仏様のような方なのでしょう。</p> <p>康世というのが父なんですが、一言でいうと「無口な努力家」でございました。仏教系大学を出ておりません。金沢大学でございまして、仏教とか古建築、古美術というのは、コツコツ本を読んで学んでおりました。つい、お坊さんの格好（僧衣（そうえ））のままで大工さんの槍鉋（やりがんな）のお手伝いとかするんです。槍鉋が使えるのが自慢でございまして、私の夏休みの宿題なんかを勝手にやっつけてしまいます。ただ、お坊さんの服装で槍鉋を使いますと、ほころびるのでございます。ですから、夜は母がいつも針を持ってほころびを繕っておりました。</p> <p>今、法輪寺の拝観案内をお持ちいただいていると思いますが、これは母が住職の代になって変えたものなんですが、父のときはもっとシンプルでございまして、三重塔の説明のところに一言、「昭代（しょうだい）各位のご賛助により」と書いてあるんです。どなたのご協力が欠けても塔の再建は成らなかったというのが、父の身をもつての経験から出た言葉だと思います。非常に短いんですが、「昭代各位のご賛助により」、これを噛みしめておったと思います。その言葉の示すような無口な人でございました。</p> <p>なかなか普通では聞けないようなお話であったと思います。私も初めて聞いた内容がいっぱいあったのですが、私が聞いている慶覚和上様は、すごく聖徳太子の教えを実現するために、法隆寺とともにご尽力された高僧だと聞いておりますし、またおじい様のあと、再建を託されたお父様の康世住職におかれましては、本当に心身ともに命を削るような作業で三重塔を再建されたと思っています。</p> <p>再建と言えば、皆さんがよくご関心があるのが、ご住職さんからもご説明がありましたが、西岡常一大工棟梁と、当時法隆寺の修理の事務所長もしていた、設計の竹島卓一博士との、熱のこもったやり取り</p>
--	--	--

平田

		<p>があったということで、よく法輪寺にも取材があると聞きますが、お寺の立場から見たらどういった感じでしょうか。</p> <p>井ノ上住職 国宝の飛鳥の塔が焼けてしまった、それを今度千年建っていく塔を建てようということで、それぞれの立場からの最良策のご提案だったと思うんです。</p> <p>かたや西岡棟梁という方は、優れた古代建築技術保持者であられますし、昭和の大修理というのが法隆寺様でありまして、それに関わったという自負もお持ちでございます。かたや竹島先生は、古代建築の千年余り経ったあとの現状を、科学的な目でご覧になっている。「ここに弱点がある。」「ここに老朽がある。」「木材のみでは、ここは辛いのではないか。補強として金属の使用もあり得るのではないか。」というお気持ちであられたようです。ですから、いろんな最良の案が組み合わせあって塔が建っているんだと思っておりますし、竹島先生も西岡棟梁さんも、その話し合いのあとは仲良く普通にしておられましたので、仲が悪ければ一緒に写真に写ることもないと思いますので、それは塔に良かれとってのご意見の討論であったと思っております。</p> <p>平田 私もいろいろお話を聞かせていただくと、皆さんは喧嘩をしているようなイメージで捉えておられるかもしれませんが、先ほどの写真(再建中の塔と人々の写真)が示しているように、お互い塔ができたときには讚え合っていたというようなところがあったのだと思います。</p> <p>難しいところは、法隆寺は修復で「元々のこの部分を使う」「この部分は差し替える」ということですが、法輪寺はゼロから建ち上げるということとの違いがあるので、竹島先生は、現代の世の中に飛鳥時代様式を用いた塔を建てるといったときには、建築基準法的な問題もあったでしょうから、「ここは鉄の銚(かすがい)を使わないといけない」といったことで、主張すべきところは主張された。一方、西岡棟梁の方では、木の特質や組み合わせ方によって、ここは別に補強しなくても大丈夫だといったような主張があって、プロ同士のせめぎ合いの中での討論だったのだと思います。</p>
--	--	---

		<p>先ほどお話しにあったように、お寺としてはやきもきした面もあったかと思いますが、最後は出来上がって、お互いを讃え合っておられると思いますので、皆さんが思っておられるようなことはないと思っています。</p> <p>さて、私の話は難しい話だったかもしれませんが、私が「知識」の結論に達したとき深く思ったのが、三重塔の再建のときのお話なんです。皆さんお気づきかもしれませんが、「知識」の話と法輪寺さんの三重塔の再建のお話は、どこか結びつくところがあると思いませんか。幸田文先生の講演活動の浄財が多く投入されているというところもありますが、いろんな方々の浄財が集まって三重塔が再建されたところが重なってくるかなと思いますが、ご住職さんはどのようにお考えでしょうか。</p> <p>井ノ上住職 平田先生がおっしゃっていただく通りでございまして、先ほど、焼け落ちた塔のお写真のときに、「国宝を解除されました」と申し上げなかったなと思ったんですが、ですから国庫補助をいただけないので、全額お寺の独力で再建しなければならないということだったんです。今でございまして、こうして皆様がおいでくださいますように、「あ、西岡棟梁がお建てになった塔のある、幸田文先生が協力された塔のある、法輪寺」とご存知ですが、昭和40年ごろは、「法輪寺？なにそれ？」だったと思います。ですから、財力もなく、知名度も低い寺が、台湾檜の本当に良い材を購入できまして、西岡棟梁といった最高の技術者の方々、また竹島先生のご苦心の設計の図面もありまして、そして浄財をお寄せくださった2万人を超えるお方、全国の2万人を超えるお方にご寄進いただいたそうなんです。昭和の皆様によって創建当初の姿で再建され、そして先ほど子持舍利のお写真を見ていただきましたが、塔の落雷のときに焼けずに拾得した仏舍利、そして平田先生がお示しくださしました、『仏舍利縁起』に描かれておりました舍利、あれらはまとめて塔の心柱の下の心礎の舍利孔の中に銅壺に入れて納めてあるんですが、本当にそういうことができたということは、奇跡と言っても過言ではないと思います。</p>
--	--	---

		<p>これから、頼りない私でございますが、精一杯、日々大切にお守りしてまいりたいと思います。</p> <p>もちろん、今おっしゃられた銅壺の本物は国の重要文化財ですので、お寺の寺宝としてお守りをしておられて、再度舍利孔に入れられたのは模造というか、そっくりにつくられたものを入れておりますので、見ることはできないのです。ただ、塔の心礎のところは見れるようになっていたので、お寺にご無理を言って、一度だけ覗かせていただきましたが、先ほどのお話とも関係がありますが、東京スカイツリーのとくにちょっと話題になりましたが、塔って「やじろべえ工法」なのです。ですから柱が地についていることはすごく意味のないことで、揺れて揺り戻しがあるわけです。そういうことを考えられてのことかもしれませんが、実は、塔心礎と心柱の間には数十センチの空間があります。まだ地まで降りていないのです。西岡棟梁曰く、「100年ほど経つと下へ降りてくる」というお考えなのですね。</p>
平田		<p>はじめから心礎の上につけてしまうと、ぐっと塔に荷重が加わって行って、年数が経つと塔の上の相輪の露盤のところに隙間が空くんだそうです。ですから、じわじわと下がっていくそうなんですけど、まだついておりませんでした。</p>
井ノ上住職		<p>もちろん古代寺院のときには、そんなことはできませんので、塔心礎の上に心柱が乗っていますので、舍利を納める舍利会（しゃりえ）を行ったあとは心柱の立柱式がありますので、そのあとに柱を浮かせることはできないわけです。</p>
平田		<p>そして、実は、おじい様・お父様で塔を再建されたということがありますが、お母様である先代のご住職と井ノ上住職との2人で最近、最近と言っても10年以上前ですが、「妙見堂（みょうけんどう）」というのを再建されていますが、妙見堂についても、せっかくでするのでこの機会にお話しいただければと思います。</p>

井ノ上住職	<p>ありがとうございます。</p> <p>昭和50年ごろ、妙見堂はかなり老朽しておりました、父は「塔の次は妙見堂」というような心づもりを、実はしておりました。ところが、塔が完成しまして5年後には、父は47歳で病没してしまいました、結局宿題のような形で残っておりました妙見堂を、母と私とで新しく、改築させていただいたのが平成15年のことでございます。三重塔用材の台湾檜がいささか残っておりましたので、「これを使ってください。」とお願いしたんです。工事は、西岡棟梁のあとの小川棟梁さんの率いる鵜工舎（いかるがこうしゃ）さんでございましたのでお願いしたのですが、悲しいことに材木も長いこと置いておきますと蒸れてしまうのでございます。だから、「これは柱には使えない。」と小川棟梁に説明を受けました。ですから、柱は吉野檜、天井などの構造物の材はカナダ檜で「米ヒバ（べいひば）」というものでございますが、それでしていただいて、ただ、床板とか、鬼子母神（きしぼじん）さんのお厨子とか、妙見さんのお厨子の下の須弥壇といったものには、三重塔の残材の台湾檜を可能な限りお使いいただきました。</p> <p>妙見様というのは、結構関東にもたくさんおられるようでございます。前に夜中に落語を聴いておりましたら、中村仲蔵（なかむらなかぞう）という方が、柳島の妙見様に願をかけてアイデアひらめくというお話がありまして、妙見様と聞いたので飛び起きてしまったんです。千葉の千葉氏（ちばうじ）が大変厚い信仰を持っておりましたので、房総半島の方にも妙見様がたんといらっしゃると伺いました。妙見様というのはお姿がそれぞれ違ったりするんですが、北極星を神格化した天部の仏様というのは変わりません。道教的な要素が大きく、どうも中国で完成した方ではないかということです。</p> <p>妙見様はどんな方と言うと、私の祖母が、「運と寿命の仏様」ときっぱり申しました。「運と寿命の仏様ってどういうこと？」と思っていたのですが、私たちの生まれ持った星を守ってくださる妙見様ということで、どうも各地でブームが起こったようでございます。</p> <p>いつも4月15日だけが妙見会式でご開帳なんですけど、今年は11月1日からの1週間の秋季特別展、妙見堂のご開帳の年に回ってまい</p>
-------	--

	平田	<p>りました。これはたまたまなんです、またおいでいただきましたら天井絵も、そして秘仏の妙見様も拝観いただけます。茨城・大洗の武石堯（たけいしとおる）という先生のお描きいただいた、新しい平成の天井絵も、江戸時代の天井絵と一緒に天井にございますので、どうぞお楽しみなさってくださいませ。妙見様は近世くらいから大変人気があったようで、正保2年の江戸時代の大風で伽藍が倒壊したときの勧進の一つが妙見信仰でございました。「聖徳太子様の感得された妙見様」という寺伝がございまして、「太子様ゆかりのお寺の、太子様が感得された妙見様。そりゃありがたい。」ということで、皆様のご関心、ご結縁を結んでいったようでございます。寺伝、聖徳太子感得の妙見菩薩でございます。</p> <p>またどうぞお参りくださいませ。</p> <p>今お話しにありました妙見堂につきましては、江戸時代にお堂がつくられたときの、基壇を発掘調査させていただいたら、瓦などがたくさん出てきました。</p> <p>江戸時代中期に法輪寺の中興というか、賑わいを成していかれる一つのきっかけとなったのが、「妙見信仰」だと思います。</p> <p>先ほどご住職がおっしゃられていたように、ここの妙見菩薩は日頃は秘仏なのです。平安後期の仏様で、普通は見れないので、ぜひこの11月、もしくは、私どもの展示は9月までに来てほしいのですが、11月1日から1週間、天井には「星曼荼羅」というような言い方もしますが、天井絵が見れたりもしますので、ぜひこの機会に見ていただければと思います。</p> <p>先ほどお話に出ておりました、小川三夫さんですが、このセミナーの最後の第5回にゲスト講師として来ていただきます。そのときにも法輪寺の再建にまつわるお話もしていただけると聞いておりますので、ぜひお楽しみにしていただければと思います。</p> <p>本日は熱心にご清聴いただきましてありがとうございます。</p> <p>これで対談は終わりにさせていただいて、司会に渡したいと思いません。</p>
--	----	---



		井ノ上ご住職さん、ありがとうございました。
	井ノ上住職	ありがとうございました。
14 : 57	藤江	井ノ上住職・平田技師、ありがとうございました。 せっきくの機会でございますので、講師のおふたりにご質問のある方がいらっしゃいましたら、その場で挙手をお願いいたします。
14 : 58	藤江	ないようですので、それでは、井ノ上住職・平田技師、ありがとうございました。 みなさん拍手でお送りください。
		～会場拍手～
15 : 00		～終了～